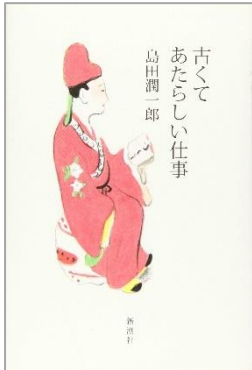




2021年9月館員おすすめの本

『古くてあたらしい仕事』(嶋田潤一郎)

原 真由美



「夏葉社」は、編集、営業、事務などすべての仕事を一人でこなす小さな出版社。「何度も読み返される本を」をモットーに、刊行される本は年3冊ほど。ホームページには丁寧に作られた本が並んでいます。

著者の嶋田潤一郎さんはこの出版社を立ち上げた理由を、相次ぐ転職活動に失敗したためとしていますが、本当の理由は幼い時から兄のように慕っていた従兄が事故で急逝し、悲しみに暮れる叔父と叔母に一編の詩を本に仕立てて贈り、喜ばせたいと思ったからです。歳月をかけて完成した『さよならのあとで』(ヘンリー・スコット・ホランド)

は、自殺によって息子を喪った父親の詩が収められた装丁の美しい小さな本です。やがて二人に笑顔が戻る頃、この本を同じような境遇の人たちに届けたいと願うようになりました。誰かの支えになりたいと始めた仕事が、「ぼくは今の自分の仕事が好きだ。大好きだ」と誇りを持って言えるまでになります。「自分の仕事をいたずらに短期決戦の場に持ち込まず…長いスパンで自分の仕事をみる」という言葉は、結果が現れるまで長い期間が必要な図書館の仕事にも通じ、同じ本を扱う者としてお手本になります。(新潮社)

『なずな』(堀江敏幸)

大久保美玲

なずなは生後2か月のあかちゃん。新聞記者の私は、やむを得ない事情から弟夫婦の子、なずなを預かることになります。仕事をリモートワークに切り替え、手を尽くしてなずなの世話をします。近所の小児科医のジンゴロ先生や看護師の友栄さん、マンションの1階にあるスナックの瑞穂ママたちに支えられながら、私の育児奮闘は続きます。

はじめから期間限定とわかっていること、そして自分の子ではないためほんの少し客観的に見れることもあり、なずなというあかちゃんの神々しいまでに奇跡的存在を、私は繊細に感じ取っていきます。そして次第に仕事で書く文章も変わっていきます。これまで常識をわきまえた一人の大人として自立して生活してきた私は、新聞記者としても認められていました。しかし、なずなの生活で「心の寸法」(p.458)が変化し、常識的でそつのない記事が、人間として暖かみのある視線を通した血の通った記事に変化したのです。あかちゃんと深く関わることによって得られる宝物が大切に描かれている本書は、保育者を目指す学生の皆さんにも是非読んで欲しい一冊です。(集英社文庫)

